

B 卒業演奏会及び卒業制作展

1. 卒業演奏会の歩み

第1期生の学び舎は現在のテニスコート場に建っていた木造2階建て校舎だった。音楽教室は現在の3号館3階、当時の短大校舎に位置していた。美術棟は現在の体育館敷地内に、木造平屋建てだった。

第1期生が卒業学年（1984年）になり、音楽領域で卒業論文を書く5人の学生と話し合った結果、論文執筆と併行して、4年次に取組んだ楽曲の発表演奏会を開催することに決まった。年度終りの1985年2月、卒業論文発表会後に、大音楽教室（現在の3号館331教室）で第1回の卒業演奏会が行われた。

この年の3月には、音楽棟（5号館）が新築されたので、第2回の演奏会からは、音楽棟2階の器楽教室で行われ、本年度で26回目に至っている。1985年度から短大廃止まで、当時の短期大学部幼児教育学科音楽コースの2年生も卒業演奏会を、初等教育学科に1回遅れで続き、最後の演奏会は2号館大講義室にグランドピアノを搬入して行った。

第12期生が卒業学年を迎えたとき、卒業演奏を学内だけでなく、家族や学外の人にも聞いてもらえる場を持ちたいと申し出た。そこで学外での演奏会は、学生主体の行事として位置付けて、会場確保や実施に係る諸々を学生主体の運営で行う形式で確立した。これまでに学外で開催しなかった年が1度あるが、学外開催は学生の総意を大事に取入れ、今日に至っている。

2. 図画工作・書道専修の卒業制作展の歩み

図画工作専修・卒業制作展は、平成20年度卒業生（25期生）の作品展で、第15回（2009年1月20日～2月27日に開催）を数えた。

平成21年度卒業生（26期生）からは、初等教育学科書写書道専修・図画工作専修の卒業制作展となった。

3. 卒業演奏会に向けての取組み

2年次からコース・専修に分かれて、専門教科・領域の演習を2年間行う。音楽専修の場合は、教材研究・文献研究や模擬授業のほか、演奏表現活動を併せて行う。2年生と3年生が分担を決めて、2号館で行うロビーコンサートや区民文化センターで行われる合同発表会、秋の大学祭でのステージ演奏に向けて、自主的に取り組む。演奏曲の選択は各自、あるいは相談し合って合奏曲や連弾曲など、さまざまである。また、演奏の場としては、ボランティアで小学校や特別支援学校などでもコンサートを行っている。

2、3年次に行った演奏活動の、言わば、集大成が卒業演奏会となる。その取り掛かりとして、3年の後期試験終了後、卒業演奏会の内容検討、各自が候補曲の検討に入り、合奏・合唱曲の相談を始める。2、3月の春休みに卒業論文に関する文献収集と併せて、個人で取り組みたい曲の候補をある程度、絞り込んで最終的な曲決め段階に入る。

幼児教育コースの場合は3年次後期から、幼児教育学演習内で研究領域別に分かれ、音楽ゼミ活動を開始する。

4年次には、専修・ゼミ内で担当の役割分担が決められ、卒業演奏系の学生が卒業演奏会の学生に関わる渉内・外のすべてを統括する。学外演奏会場との事前打ち合わせや広報活動・案内状作成なども行う。

演奏準備としては、前期中、卒論ゼミの時間内で演習を行い、後期に入ってから、ゼミの時間を増やして、個人で取り組む楽曲の演習と合わせ物や合奏・合唱の演習を卒論執筆と併行して行う。

学外演奏会は年度によって違うが、12月か1月中に行い、学内は卒論発表日の卒論発表後に、演奏会を行う。

4. 卒業制作展への取組み

図画工作・書写書道専修の場合は、2、3年次の教科教育学演習内で制作した作品を区民文化センターで行われる合同発表会や秋の大学祭の文化展で展示発表を行っている。また、1号館展示スペースを活用して、随時、そこでの展示発表も行っている。

卒業制作として図画工作専修では、F50号（1167×910mm）相当の作品を3点程度制作している。小品で連作とすることも可能である。制作過程を論文形式でまとめている。卒業論文を選択することも可能である。

作品には、油彩、水彩、版画、パステル、染色などがある。写実的な作品、空想画のようなもの、イラストレーションのようなものもある。

幼児教育コース図画工作ゼミでは、卒業論文が主体であるが、研究に応じて作品を作る場合は、卒業制作展で展示も行う。作品には、手作りの絵本（仕掛け絵本、手描き絵本、布絵本など）、紙芝居、壁面装飾、技法遊びなどがある。

書写書道専修の演習内容については、詳細を本章第5節で述べている。

5. 卒業演奏会、卒業制作展から学ぶこと

卒業制作展に取り組む図画工作・書写書道専修は、同じ芸術分野であり、その取組みには、音楽の表現活動を通じた学びと同様なものがある。ここでは卒業演奏会についてだけを述べる。

文部科学省が定める小学校学習指導要領に、「表現及び鑑賞の活動を通して、音楽を愛好する心情と音楽に対する感性を育てる」と、掲げてある。教師が児童に対して、CDなどの音源を用いて、「音楽に合わせて、はい、歌いなさい。はい、楽器を演奏しなさい。」と、指示するだけの指導方法で、果たして愛好する心情や感性が育つであろうか。

「音楽」は確かに音を楽しむと書く。好きな音楽を聞いたり、聞き流したり、あるいはメディアから流れる音楽や映像に合わせて口ずさんだりすることは楽しいことであり、音楽を享受していることには違いない。ただ、音楽を担当する教師あるいは保育士は、音楽を受動的に享受するだけでなく、自らが音楽を表現する楽しさを体得しておく必要があると考えられる。その実践研究の最終目標として、卒業演奏が行われる。



学外卒業演奏会

卒業演奏会は結果発表の場ではあるが、それがすべてではない。学生一人一人が演奏しようとする楽曲と向き合った時から、発表する卒業演奏会までの過程をどのように取組んだのか、それが重要である。

まず、曲を把握するだけでも回数多く、長時間の練習を要する。しかし、回を重ねるごとに、難しい箇所を乗り越えることができるようになる。楽曲解釈の全体把握をしながら、徐々に表現方法を工夫して仕上げる中で、幾通りもの表現方法が考えられる。また、深く掘り下げた分析を下に、練習を重ねることによって、表現力に幅ができ、自身が納得できる演奏表現を見つけることができる。楽譜を無視したような演奏は論外だが、同じ曲（楽譜）に取組んでも、それぞれがコピーのようなまったく同じ演奏になることはあり得ない。つまり、同程度に取組んだ人同士でも演奏表現に違いはあるし、練習量に違いがあれば演奏にも違いが出てくるし、取り組んだ中身が結果として演奏に表れる。

卒業演奏会までの長い道のりの中で、苦しい思いをする練習を乗り越えたり、独創性のある表現を工夫できたりして、演奏する喜びや楽しさを学ぶことができる。それらの学びを教育現場や保育現場で活かして、感性豊かで表現活動を楽しむことができる子どもを育ててもらいたい。

(新宅雅和)